

朔太郎詩参考資料

萩原朔太郎の詩であれば、ほかのものでも構いません。

およぐひと

およぐひとのからだはななめにのびる、  
二本の手はながくそろへてひきのばされる、  
およぐひとの心臓はくらげのやうにすきとほ  
る、  
およぐひとの瞳はつりがねのひびきをききつ  
つ、  
およぐひとのたましひは水のうへの月をみ  
る。

金魚

金魚のうろこは赤けれども  
その目のいろのさびしさ。  
さくらの花はさきてほころべども  
かくばかり  
なげきの淵に身をなげすてたる我の悲しさ。

竹

光る地面に竹が生え、  
青竹が生え、  
地下には竹の根が生え、  
根がしだいにほそらみ、  
根の先より繊毛が生え、  
かすかにけふる繊毛が生え、  
かすかにふるへ。

猫

まつくろけの猫が二疋、  
なやましいよるの家根のうへで、  
びんとたてた尻尾のさきから、  
糸のやうなみかづきがかすんでゐる。  
『おわあ、こんばんは』  
『おわあ、こんばんは』  
『おぎやあ、おぎやあ、おぎやあ』  
『おわああ、ここの家の主人は病気です』

亀

林あり、  
沼あり、  
蒼天あり、  
ひとの手におもみを感じ、  
しづかに純金の亀ねむる、  
この光る  
寂しき自然のいたみにたへ、  
ひとの心霊にまさぐりしづむ、  
亀は蒼天のふかみにしづむ。

かたき地面に竹が生え、  
地上にするどく竹が生え、  
まつしぐらに竹が生え、  
凍れる節節りんりと、  
青空のもとに竹が生え、  
竹、竹、竹が生え。

旅上

ふらんすへ行きたしと思へども  
ふらんすはあまりに遠し  
せめては新しき背広をきて  
きままなる旅にいでてみん。  
汽車が山道をゆくとき  
みづいろの窓によりかかりて  
われひとりうれしきことをおもはむ  
五月の朝のしののめ  
うら若草のもえいづる心まかせに。

月夜

へんてこの月夜の晩に  
ゆがんだ建築の夢と  
酔っぱらひの円筒帽子。

※詩のふりがなは、前橋文学館がつけたものです。